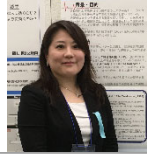


2019年度しあわせ研究

急性冠症候群患者における
健康行動と関連因子の検討

研究員 野口普子、成澤知美
浜崎景、松岡豊



本研究は心筋梗塞を含む急性冠症候群 (ACS) 患者について検討を行ったもので、3報目になる。

幸福感をはじめとしたポジティブな感情は、健康であることや well-being などと関連していることが知られている。

世界的に最大の死因は心疾患、がん、呼吸器疾患、糖尿病などの慢性疾患であり、行動要因、特に喫煙、食事、運動習慣、飲酒などがその重要な原因であり、これらは効果的な健康行動介入によって、早期死亡を減少させ、医療費を削減できると言われている。健康行動の研究において最も広く使用されている理論の一つに健康信念モデル (HBM) がある。HBM は人々が病気の予防、発見、コントロールに必要な行動を行うかどうか、なぜ行うかの予測に影響を及ぼすとされる構成概念が含まれている。HBM は人々が病気の予防、発見、コントロールに必要な行動を行うかどうか、なぜ行うかの予測に影響を及ぼすとされる構成概念が含まれている。それは「罹患可能感」、病気の「深刻感」、行動に伴う「利益感」と

「障害感」、「行動のきっかけ」、「自己効力感」が挙げられる。このモデルは病気に罹るリスクを減らすだけでなく、治療アドヒアランスといった病気の影響を減らす行動にも応用できると考えられている。

そこで、ACS 発症後に緊急経皮的冠動脈インターベンション (PCI) を受けた 20 歳以上の ACS 患者を連続的にサンプリングしたデータを用い、健康行動の変化に影響を与える要因を検討したが、関連因子は認められなかった。今回は、探索的に関連因子を検討したので研究デザインに限界があった可能性がある。

昨年に引き続き、精神健康に関する解析を行った。ACS 患者の PTSD 症状および認知的評価は、ACS 直後から 6 か月間の中に軽快していることが示された。一方で、少数ながら中程度以上の PTSD 症状が持続している ACS 患者は認知的評価が悪化したまま持続しているため、留意が必要である。また、ACS 発作時の心理的苦痛が PTSD 症状に影響を与えることが明らかになった。さらに、ACS 後の絶望感は 6 か月時点の精神疾患を予測した。

ACS 後の精神健康と関連する因子としていくつか見出されているので、循環器領域でのケアにつながることで、ACS 患者の「しあわせ」に繋がることを期待する。